

水口拓壽編『術數學研究の課題と方法』

奈良場 勝

本書は二〇二〇年五月に東方學會第六十五回國際東方學者會議の一部として開催豫定だったシンポジウム「術數學研究の課題と方法」の企画に基づいている。残念ながらこの年のシンポジウムは新型コロナウイルスの蔓延によって中止となつてしまい、一年後にオンライン形式で實施されたということである。

さて、本書の構成は以下の通りである。

始めに——術數學研究の來し方と行く手 水口拓壽
術數學——數と易のパラドックス 川原秀城
漢代における術數と天文學的宇宙論 高橋あやの

テキストの變容する過程に關する一試論——

『洪範五行傳』を題材に論ず

平澤歩

中國歷代王朝における天文五行占書の編纂と

禁書政策

佐々木聰

儒學・術數・方技を結合する

——朱震亨『風水問答』の達成と挫折

水口拓壽

五四以後中國「子平」術面臨的困境與轉進（中國語）

張哲嘉

五四以後に中國の「子平」術が直面した苦境と

その轉進（日本語）

張哲嘉（水口拓壽譯）

終わりに——術數學研究の途上にて

水口拓壽

編者の水口氏の「始めに」によると、劉師培「術數學史序」（一九〇五年）、木村英一「術數學の概念とその地位」（一九五〇年）の兩論文から始まる術數學研究には見直される点もあるという。劉師培については術數學の歴史に關する没落史觀、術數學と君主權力の本來的關係を天人感應説に見るような君權抑制という方向で捉えた點などが指摘され得るし、木村英一については術數學の總體を『周易』一つで代表されるが如き論法などがそれであるとする。また、一九七〇年代以降の出土資料の發見や科學技術史研究の發展、術數文獻の電子化の波などにより、術數學研究の最先端は「不斷に更新されている」という。「術數學研究の來し方と行く手」と副題が添えられた所以である。

川原論文は第一節「術數學の定義とその基本的性格」、第二節「術數學の基本書」から成る。第一節は劉歆（？後二三）『七略』より起る目錄學をもとにした術數學の定義に始まる。術數概念の經年變化は興味深い。

『七略』數術略から『明史』藝文志まで、術數には曆數・天文・五行といった曆算と占術の分野が含まれたまま發展してきた。しかし、清の『四庫全書總目提要』に至って「天文算法」と「術數類」とは別のものになった。次に易は經なのか占術であるのかという問題についてである。劉歆『七略』は易を六藝の頂點に置いた。目錄學では易學の支流が術數學であるとしながら、易學の本流は六藝學として貴び、術數學とは區別している。この點について論者は、易學は占術を派生する要素を含んでいるため、「易學の本質が占筮にあることを否定することはできない」としている。第二節は後漢一世紀ごろの成立とされる『九章算術』と劉徽（魏晉の頃）注について分析する。算例に見るアルゴリズムを考察し、「現行の數理科學に匹敵する正確さと精神を具えた専門科目」であるとしている。これに續き、『周易』の數構造について、朱熹『周易本義』伏犧六十四卦次序圖、馬場信武『易學啓蒙圖說』伏犧六十四卦方圖を見る限り六十四卦は二進構造（加一倍法）のように思われるが、生成にお

ける三畫の重卦という點で『周易本義』伏犧八卦次序圖も重要であり、加一倍法のみでは成り立たない構造であることを詳述する。續いて『易學啓蒙』明著策、考變占を引き、數構造に由來する卦爻辭の導き方について説明する。卦爻辭の解釋をめぐる義理易と象數易の對立については、「經原理と術數原理の葛藤がもたらしたもの」として、副題の「數と易のパラドックス」に提示されている。

川原氏には『中國の科學思想—兩漢天學攷』（一九九六年）がある。歷代の書籍目録に見る術數の分類、劉歆の三統曆の數理構造、楊雄『太玄』のアルゴリズム、蔡邕の律曆思想、京房の六十律など、主に「曆術」の面から天學について述べられており、『九章算術』の數理がどれほど分厚い知的蓄積の上に成り立っているかを知ることができる。近著では『數と易の中國思想史—術數學とは何か』（二〇一八年）があり、「命題」によって術數學を定義し、對象の性格を明らかにした。大衍求一術の説明で示される現代數學の連立合同式などは難解に思わ

れるが、術數學研究者には相互の研究内容を理解するためにこうした數理についての基礎知識は必要だろうと思う。

高橋論文は五節から成る。第一節は「數」「天數」といった術數學の根幹とも言える語について述べる。『史記』淳于意傳の「數有る者」について唐代の司馬貞は「數」を術數であると捉えており、『漢書』東方朔傳にも「數家」の語があり、顏師古が「數家、術數之家也」と註しているという。そして「數」は「易の數理、あるいは世界の道理のようなものを意味していた」とする。「天數」は『史記』天官書の例によれば、天文占や星座の運行に精通した者を指しているという。また天數を修めた者は「三五」に通じるとされ、劉歆の三統說との関連も考えられるという。『漢書』天文志や藝文志には「天文」の語が見えるのに、『史記』には天官書にも「天文」の語が見えない點については、「司馬遷は天と地を分けて論ぜず、天官書でもって天地を含めた陰陽の變化

を語ろうとする意圖があつたのではないか」とする。

「數」よりも「術數」、「天數」よりも「天文」の方が具體的な技術に近い意味を持つと言えるという。第二節は『史記』『漢書』『續漢書』といった史書の天文志に宇宙論が取り上げられていない理由について考察し、問題提起を行っている。この點については「宇宙論はそもそも世界觀を論じるものであり、天象とその占いについて述べる天文とは切り離されて考えられていたのではないか」としている。第三節は宇宙論三説のうち、蓋天說と渾天說の見える文獻『淮南子』『靈憲』について詳述する。『靈憲』と『渾天儀』はともに張衡（七八―一三九）の著作とされるが、『靈憲』が天文志に引用されるのに對し、『渾天儀』は律曆志に引用される。これは『靈憲』が渾天說を述べたものの、『渾天儀』は觀測儀器について述べたものと見做されたことを示しているとする。第四節は髀と渾天儀という天文觀測儀器について述べる。髀は太陽の觀測に、渾天儀は月や星の觀測に用いられたものだという。したがって宇宙論との對應ではなく、曆と

の關係が見えてくるといふ。第五節は張衡が「九道法」（月の軌道を計算する方法）を支持していたこと、楊雄『太玄』に非常な關心があつた點について述べる。『太玄』は曆との繋がりは明らかとされるが、三と九の數理、あるいは三進法の數理が宇宙論の觀點からも支持されていたことを明らかにした。「おわりに」の中で「天文と術數の關係性をより詳細に検討していくことが、今後の術數學研究の一つの課題といえよう」と更なる發展研究の可能性について述べている。

高橋氏は「張衡『靈憲』の天文理論と尙水思想」（二〇一二年）で『易』や『老子』が宇宙生成論にしばしば引き合いに出されるが、『靈憲』が『周髀算經』や『淮南子』の理論を單に繼承するばかりでなく、理論的にも確實に發展している點を指摘していた。天文・宇宙論を考える上で『靈憲』は非常に重要な資料なのである。また『張衡の天文學思想』（二〇一八年）では、張衡に関する複數の論考の他に佚文資料の整理、天文占の資料である『海中占』テキストの詳細な比較を行っている。そう

した多角的な天文占研究を基盤として、術數學として捉え直すべき問題を五節に纏めたのが本論文であると言えるだろう。

平澤論文は『洪範五行傳』のテキストの改變の問題を扱ったものである。第一節では『漢書』五行志に引用される本文が『洪範五行傳』の古い文言を残していることから説き起こす。前漢後期の劉向は宮中の藏書から見出した『洪範五行傳』に解釋を加え『洪範五行傳論』を著す。劉向が用いたテキストは夏侯尚書の學派に伝えられたものと同様のものではあった。第二節では劉向の子である劉歆の『洪範五行傳』について論じる。『漢書』五行志に引かれる本文（『漢書』藝文志、『隋書』經籍志は著録しない）を見る限り、『呂氏春秋』十二紀、『禮記』月令と合致するように改變されているとする。五德終始説についても、土木金火水の相勝の順を木火土金水の四季の順に組み替えたのも、月令との整合性のためであると見る。第三節では、清代に編まれた『尚書大傳定本』には

『洪範五行傳』の方位・月令の佚文を含み、季夏が中央土にも南方火にも配置されるのは、異なる複數系列の説を融合させる中で矛盾を引き起こした結果であるとする。第四節では、傳統的な尚書洪範の學からの「膨張」について説く。まず『南齊書』五行志の引く『洪範五行傳』の本文を検討する。これまでの正史五行志の引用と異なり、『洪範五行傳』の文を冒頭に掲げず、引用も斷片的であるという。『洪範五行傳論』からの引用の可能性も指摘する。『魏書』靈徵志も災異の冒頭に『洪範五行傳』を引くことはほとんどなく、『洪範論』（『洪範五行傳論』）、『京房易傳』を引くが、その『洪範五行傳論』にしても劉向が著したものとは趣旨の異なる本文が流入しているという。第五節では隋唐期の『洪範五行傳』の内容がさらに雑多になった原因について『隋書』五行志を對象に考察する。「洪範五行傳曰」とあつても、それが『漢書』等の早期の文獻に見えない事例がある。これも『魏書』同様に流傳の過程で流れ込んだと考えられるという。こうした時代背景として、三國六朝期に博物の志向が盛り

上がった點に着目する。體系的に災異を解釋するという『洪範五行傳』『洪範五行傳論』本來の趣旨から離れ、様々な事物についての解釋を参照するための文獻として使われたせいではないかとまとめている。

平澤氏は『漢書』五行志と劉向『洪範五行傳論』(二〇一年)以來、『洪範五行傳論』に焦點を當ててきた。漢志に『洪範五行傳論』が引かれた後に「説曰」、あるいは「一曰」とある部分について、陳侃理氏の説を支持しつつ検討を加え、發展させている。このような取り組みを踏まえ、劉向の災異解釋の趣旨とは異なる引用事例がテキスト變容の一形態であることを明らかにした。

佐々木論文は三節から成る。第一節では(一)漢代、(二)魏晉～隋唐、(三)宋～元、(四)明～清の歴代王朝で編纂された天文五行占書を整理して紹介する。論者はこれらを「敕撰系占書」と總稱する。漢代の記録からは後の『開元占經』一百二十卷に匹敵するような規模の天文五行占書は見られず、晉代に入ると天文官のトップで

ある太史令らの撰述したものが記録に見え始める。その中でも『荊州占』として引く占辭が『開元占經』に一千二百條以上もあり、その影響の大きさがうかがえるという。唐代の『開元占經』は、それまでの書物が天文占中心だったのに比べ、天文占と五行占の兩方を具えている點が大きな特徴である。『宋史』藝文志子部五行には『乾坤寶典』という四百五十五卷もの規模の書物がすぐに見えるという。宋代の目録では、それまで天文類に載録されていた占書の一部が五行類に移され、敕撰系占書に天文占と五行占の兩方を載録することが浸透する。元代は確認できる敕撰系占書が見えず、不明な點が多いようだ。明代では『天文祥異賦』から派生した『天元玉曆祥異賦』などの諸本が大きなシェアを占めていた。清代になると、敕撰系占書は子部天文類から子部術數類占候之屬に移される。『天文大成管輅輯要』の版本は日本やベトナムにも傳播しており、影響力の極めて大きな一書であるという。第二節では天文五行占書の禁書政策について、(一)唐宋以前、(二)元代の變化、(三)明清時代

の禁書緩和、といった段階的變化について詳述する。唐宋以前は「妖書」の單純所持でも「徒二年」の刑、「妖書妖言」によって人を惑わすと絞首刑もあり得たという。しかし、元代以降は、禁書の廢棄勸告を無視すると「杖一百」と家産の半分を沒收というように量刑が輕くなる。清代では『明律』よりも規定が厳しくなっているように見えるが、これは天文圖讖と妖書が區別されるようになったからであり、禁書の中に天文五行占書と思われるものは見えないのだという。第三節では敕撰系占書の流布狀況について、そのほとんどが明清時代のものであるとし、宋代以前は私撰占書や通俗占書の流布が多かった點を明らかにする。これは元代以降に敕撰系占書の私藏についての禁が緩み始めたことと關係するという。天文圖讖の禁の有名無實化は天文五行占の地位が低下し、王者の「天學」ではなくなったことを示すが、「かえって廣く社會に流布すること、社會通念としての怪異觀に浸透してゆくこととなった」と指摘する。

佐々木氏にはすでに唐代の『開元占經』諸抄本の研究

がある。特に成化閣本については『開元占經』閣本の資料と解説』（二〇一三年）で天文五行占研究の重要資料となる讖刻を完成させている。こうした研究の中で、元代には傳存が不明確であった『開元占經』が、元代の『至正條格』の中に禁書として見えていることから、同時代での傳存の根據となり得るとしている。この點なども佐々木氏が天文五行占書の禁書政策に着目する契機となったのかも知れない。

水口論文は元代の朱震亨（二二八二―一三五八）の『風水問答』を取り上げる。その理由は三つあるという。第一は傳世の風水書は陰宅風水（墓の吉凶判斷）を主な内容とするものが壓倒的に多い中で、『風水問答』は陰宅風水を否定し、陽宅風水（住宅の吉凶判斷）のみを肯定すること。第二は陽宅風水的宇宙觀を構築するに当たり、醫書の『黃帝內經素問』から言説を取り入れたこと。第三は風水という術數を朱子學系知識人が儒教經典や道學文獻に典範を求めたものと言えること。論者は『風水問

答』に儒學（道學）・術數（風水）・方技（醫學）の結合を認めている。陽宅風水を肯定する論法として、これまでは「地之陰氣（地氣）」が人の禍福を左右するとされていたが、朱震亨は「天之陽氣（天氣）」が人の健康や壽命に與るのみではなく禍福をもたらすと説いた。

「天から下降した氣は、地面に覆い被さるようにして地上を流れ巡るが、働（清）と陰（濁）の混淆状態は各々の地點において異なり、その結果として、天氣が禍福という尺度上で人に及ぼす影響は、地點ごとに違いを生じる」という論理である。そして住宅は天氣を地上に蓄積する装置として重視した。陰宅風水の先祖の墓が子孫に福をもたらすという考え方との違いに氣づかされて興味深い。第五・六節「風水問答」の達成と挫折」では、人に禍福をもたらすのは地氣ではなく天氣であるという朱震亨の言説によって、醫學的知見と人の性（神明）についての道學的融合が圖られたことを達成點として述べ、『黃帝內經素問』の影響を指摘している。一方、朱震亨と同時期あるいは近接時期に理解者と呼べる讀者が少な

く、一般では依然として陰宅風水への根強い依存が続いていた。彼の試みは挫折に追い込まれたと結論附けるものの、術數の目録學的分類に収まりきらない内容は元代の風水理論史研究の上で貴重なものだとする。

水口氏は「四庫全書における術數學の地位―その構成原理と存在意義について―」（二〇一〇年）で『四庫全書總目提要』の術數類序の記述から四庫館臣たちが術數類を「易の支流」と概括して評價していた點を明らかにし、さらに相宅相墓之屬に著録された文獻から術數學の地位を分析した。また、『儒學から見た風水―宋から清に至る言説史』（二〇一六年）では『發微論』や『劉江東家藏善本葬書』鄭謐注等によって、南宋代後半の儒教知識人たちが風水理論家としての一面を合わせ持つに至る過程が詳細に述べられている。ここが術數概念の第二期の轉換期とされる理由がよくわかる。

張論文は五四運動以降の中國で「子平」が西洋近代化の波を乗り越えて今日に至る過程を詳細に述べたもので

ある。「子平」とは年月日時に基づく算命術であり、日本の四柱推命のもとになっている占術である。『三命通會』（一七三五年序刊）巻七の巻頭「子平說辯」に歴史や占法の概略が述べられているので参照されたい。それによれば「其源蓋出^二於戰國珞珠子^一。」という。占術名は術の繼承者「子平」に因んでいるとされ、明清になって『淵海子平』（一六三四年序刊）、『三命通會』といった基本テキストが成立した。清末に至るまで民衆に深く浸透した占術であったようだ。五四運動の後、一九二八年に國民政府によって公布・施行された傳統占術排除の政令によって業界は打撃を受けるが、張論文によって、この政令以前から西洋近代化のもとで科學對迷信の對立が始まっていたことがわかる。この時期に「命理が決して迷信的ではないと主張したのは、むしろ科學を學んだことのある人士ばかりだった」という論者の指摘は興味深い。民國以降の所謂「命理三大家」袁樹珊・徐樂吾・韋千里のうち、第三節では袁樹珊『述卜筮星相學』（一九二九年）を取り上げた。その中に見える命理學の合理性と科

學性を辯護する記述に注目し、袁樹珊の活動に呼應する同志たちのネットワークが擴大する様子が詳細に述べられている。第四節では、徐樂吾が子平の古籍に注解を施した學者であるがゆえに、同時代の人々からさらなる命理の科學化を期待されながら、あえてその先に進むことをしなかった状況が述べられている。一九二四年頃から新聞や書籍で在命中の有名人の命理判斷（批命）が發表されるようになると、命理の判斷例（命例）の古典であった『三命通會』が統計學的に見直されることになった。張論文によって、中國醫學が政治的に厳しい壓迫を加えられたのに比べ、命理はうまく新時代に對應したと言えることがわかった。本論文は傳統占術が近代化の危機を乗り越え、轉換的發展を遂げる過程を扱ったものである。讀後には科學との對立という占術の持つ宿命はこの先も變らないのだろうかという豫感と同時に、人間の幸福願望が續く限り、案外したたかに生き延びていくのかも知れないという手應えも感じた。

評者個人としては、子平の時代的な基礎研究の現状に

ついても知りたいと思った。これは張論文の主旨とは異なるのだが、例えば年月日時が「四直（値）功曹」という擬人的神格を得て、『西遊記』や斷易祭文等にかがえることなどは、子平の定着や發展段階を考える上でも重要なのではないかと思われる。

本書に先立ち、池田知久・水口拓壽編『中國傳統社會における術數と思想』（二〇一六年）が刊行されている。

その跋文で水口氏は、「術數學研究の主題として關心の共有が一層廣げられるべきものや、見解を異にする研究者の間に一層活發な議論が期待される論點」として以下の六點を擧げていた。

- ①術數學をどのように定義するか。
- ②術數學という概念の發生時期や形成過程。
- ③術數學と方技の學の關係。
- ④術數學が傳統中國の思想界や社會に有したプレゼンス。
- ⑤近現代の華人世界における術數學のありかた。

⑥術數學の研究史とその得失。

今回の論文集が編まれるに當つて、論者諸氏はそういった觀點からの完成圖を共有しながら執筆に臨んだのだろう。そしてそれは本書によつて完遂されたと思う。編者の水口氏の「終わりに」に印象的なことばがあった。「そもそも術數學研究とは、恰も世代を超えて引き繼がれる、終わりのない長旅のようなものだ。いつか誰かがゴールに辿り着いたと宣言することがあろうとも、やがてその場所から、また幾本もの道が伸び出してくるに決まっている」と。

（A4判、二四四頁、二〇二二年三月二十四日、

汲古書院、八八〇〇圓）